



## 羅針盤

中川 浩一  
Koichi Nakagawa

大阪府済生会富田林病院皮膚科 部長



## 井上勝平先生と私

先日、日本臨床皮膚科医会総会(2011年6月、大阪)に参加させていただいた。今年は東日本大震災の影響で日皮総会が中止になったためか、例年になく多くの皮膚科医が参加されたようである。会ではいくつかのシンポジウムや教育講演を聞かせていただいたが、中でも井上勝平先生(宮崎大学名誉教授)のデルマドロームに関する講演はすばらしいものであった。

井上先生と私の出会いはかれこれ30年くらい前にさかのぼる。九州で、日皮総会だったと思うが大きな学会があった。その学会のCPCに私は演題を出していて、当時はすべてスライド発表だったので、スライド受付で自分の用意したスライドをフォルダーに入れていた。その時、横にいた“おじさん”が井上先生であった。先生は、通常考えられないほどの大量のスライドを準備していた。当時、その先生が座長の井上先生であることも知らず、CPCのシステムも知らなかった私は、どうしてあんなにたくさんのスライドを持ってきているのだろうと不思議だった。もちろん、その疑問はすぐさま解消されたのだが、座長の井上先生は一題一題の演題に対して、その病理組織のポイントや考えられる診断・鑑別診断を理路整然と説明された。晴天の霹靂だった。もちろん、帰阪してすぐに先輩医師に、こんな偉い先生がいましたと報告した。すると「中川君、今の皮膚科学会では東の西山、西の井上と言うんや」と教えられた。

それからは、井上先生の陰のファンとして、積極的に井上先生の手記を読んだり、講演会にも出席させていただくようにした。そんなおり、先生の執筆された『皮膚病診療ノート(田辺シンテックス 1991年)』を拝受する

機会を得、ますます、井上先生の信奉者になってしまった。

この書は単なる皮膚疾患の教科書ではなく、皮膚科医としてのものの考え方から患者さんの診察の仕方までもが書かれており、さらに皮膚科学者としての研鑽の方法までも述べられている。とくに「フェリダブラバとタルタル」の話は、いかに医師は患者の言葉に耳を傾けなくてはならないかを教えている。すなわち、井上先生が、鼻に肉芽腫性病変をわずらった農婦の主治医となった時のことである。診断に苦慮していたおり、農婦の話をよく聞くと、かつてブラジルに移民していたことがあり、現地でフェリダブラバという病気にかかったことがあるとのことであった。そのフェリダブラバを調べるとリーシュマニア症のブラジルでの俗称ということがわかり、タルタルはアンチモン製剤のことであった。結局アンチモン製剤の投与によってその農婦は治癒したという症例であった。本書はすでに絶版となっていると思われるが、内容の一部は西日皮膚に連載されていたので、興味ある方は検索していただければと思う。

現在、井上先生は信州の方で開業されているが、今回の講演を聞かせていただいて、まだまだ井上イズム健在なりの感を得た。もちろん、私なんぞは先生の足元にも及ばないが、先生の教えをひとつずつ守って、皮膚科医として少しずつでも成長したいと願っている。

